

〈研究ノート〉

ハリウッドのジョン・ファウルズ ——「日誌」に記された「コレクター」とアメリカ

星野英樹

要約

イギリスの作家、ジョン・ファウルズは「魔術師」、「コレクター」、「フランス軍中尉の女」、「ダニエル・マーティン」などの長編小説で知られるが、「木」「難破船」などの写真を付したエッセイ集に加えて、膨大な原稿から編集された「日誌」を最晩年の作品として発表した。「日誌」の記述はフランス文学専攻の大学生時代に始まり、晩年まで至るが、そこに記述された日常の記録は、赤裸々な人間関係から動植物の観察記録、旅行記、絵画、演劇、映画、音楽まで多岐にわたり、ファウルズの世界観の変遷を克明に伝えている。

1960年代は、ファウルズが第1作「コレクター」を出版し、さらには映画化が企画されたことにより、ハリウッドを訪れ映画制作に携わって帰国するまでのさまざまなエピソードを扱っている。日誌に綴られたイギリス人ファウルズの異国アメリカ、ハリウッドへの眼差しに注目し、作品理解への端緒とすることが研究ノートの目的である。

キーワード

①ジョン・ファウルズ ②ハリウッド映画 ③「コレクター」 ④イギリス文学 ⑤日記文学

I. はじめに

「死後、新たな作品が出版される可能性がある」¹⁾と期待されながらも、ジョン・ファウルズ (John Fowles, 1926-2005) が2005年に世を去ってから、それまでの作品の評価を大きく変える小説は姿を現していない。しかし、死を跨いで出版された「日誌」(*The Journals*, 2003, 2006) 2巻は、ファウルズの多作とは言えないノンフィクション分野での代表的作品の一つであり、「作品」としての評価が期待されるところであるが、研究書で新たに大きく扱われることは少ない。

ファウルズに対する全般的評価は、比較的最近、イギリスで出版された以下の文学百科事典の記述が適当であろう。

博学ぶり、文学様式に対する実験性、そして卓絶したストーリーテリング能力で知られるジョン・

平成29年10月30日受付 平成29年12月12日受理
ほしの ひでき：淑徳大学 人文学部 教授

ファウルズは、商業的成功と批評家の高評価の両方を手にし（また、それを維持し続けている）、同世代のイギリスの作家たちのなかではユニークな存在である。批評家たちの評価は1990年代初めの作品でピークを迎えたが、ファウルズは、イギリスの戦後の最も人気があり重要なフィクション作家の一人となっている²⁾。

さらに、別の百科事典の記述を参照しても、ほぼ同様の評価が確認できる。

ジョン・ファウルズ（1926年生まれ）はベストセラーの小説家であるとともに、その作品は学術的研究者たちの賞賛も得るといった特質を備え持っている。ファウルズの小説がベストセラーである理由ははっきりしている。敬愛するダニエル・デフォーのようにファウルズにはストーリーを語る並外れた語りの推進力と読者が読み始めたら終わりまで引きつけてやめられない能力を持っているからである。ファウルズはそのフィクションの危うさで読者を翻弄し、結末の多様さでも読者をじらし、登場人物は最後はいったいどうなってしまうのだろうとやきもきさせるのである³⁾。

つまり、出版した小説が次々と世界的なベストセラーとなった大衆的な人気の高い作家であると同時に、その小説がアカデミックな批評家たちからも強く支持されており、通例、相反するとも考えられる2つの要素を兼ね備えた、類まれで特異な作家として認められているのである。

こうした評価が定まりつつあるファウルズが草稿として残した100万語の日記から編纂された「日誌」は、日常的に日記を書き続けていたファウルズの創作の淵源を研究する重要な記録であるが、本稿で焦点をあてる箇所は、1960年代の処女作「コレクター」(*The Collector*, 1963) 出版前後の執筆の様子、アメリカへ渡る経緯など、それ自体が読み物として一般読者にも楽しめ、また、後に生み出される作品への影響の観点からも極めて興味深い研究資料となっている。

「コレクター」の出版と映画化が企画された当時のファウルズの胸中にあった文学と映画の関係、イギリスとアメリカの精神的風土の違いに対する意識について、「日誌」第1巻の記述を通じて詳らかにすることによって、「作品」としての「日誌」の魅力の一端を伝えるとともに、初期の代表作「コレクター」の作品解釈に資することができれば、本研究ノートの目的は達せられたと言えよう。

II. 端緒

1960年12月2日

「コレクター」。一週間前に書き始めた。新鮮な気持ちだ、自分自身のことを書くのではないので。コレクター（収集狂）自身は、我々の現在の社会の凡庸さを象徴することになるだろう。つまり、囚われた者の希望、本当の生命力が無意味に悪意を持って打ち碎かれるのだ。(p.452)

後に大きな商業的成功をおさめることになる第一作目の小説は、このように、当時の現代社会を象徴する意図を持って、ある種の開放感すら伴って執筆開始が吐露される。そして、出版の目処が立ち始めると映画化の企画も持ち上がり、作品の主題について作者自らのより詳細な意図の説明も求められるようになる。そのあたりの経緯は「日誌」に記された編集者との以下のやりとりに記録されている。

1962年7月8日

マシュラー様

「コレクター」

映画化の可能性。カレル・ライス監督に原稿を見せることにどこまで本気だったかは知りませんが、でも、数ページ分は映画にする案をメモしてありますので、お役に立つのでしたらお見せします。でも、案とは反対のものとなりそう。

書いた理由。間違った印象を与えてしまったかと思います。つまり、何年か前に新聞に載った事件で着想を得たと。(昨年、似た事件がイングランド北部でありました。)でも、地下牢に閉じ込められたアイデア全体はバルトークの「青髭」を見て以来、興味があり、例の地下シェルターの事件よりも前からなのです。いずれにしても、瓶の前にワインは所有していたのです。「青髭」の瓶が先あってその中に入れるものをあとから考えたわけではありません。言いたいのは、小説のこうした側面は重要でないということです。

最後になりますが、私はイギリス文学よりもずっとフランス文学のことを知っています。(ジェイン・オースティンはリストの筆頭にきますが)古くても新しくても小説家で最も尊敬しているのはフランス人です。ジッド、カミュのような作家からはどのイギリス人作家よりも大きな影響を受けた気がたしかにするのです。(p.513-514)

端的に表現された作品の意図と、あまりにあからさまなフランス文学贋員。フランス文化嗜好は後に刊行される著作の随所に顔をのぞかせる。

1963年1月10日

「コレクター」はいろいろな不安材料をもたらした。出版の5ヶ月前だが、比較的成功をおさめているようだ。(最初の小説にしては)大金を手にしたし、読んだ人の評判もいい。だが、専門家たちは怪しげな作品、一時的な成功だと考えているようだ。

1つの大きな問題は、夏(5月)にセント・ジョージ通りを出るかどうかだ。もし映画化の金が入れば出て行かないわけではないが、入ってこなければ出て行く気はない。口座も設けたし、税金のこともうまくやるようにと、担当として雇った妻エリズにも助言している。そして10年分の必要経費も申告するようにと。

いろいろなことで落ち着かなくなり、集中できなくなった気がする。待ち受けていることすべて、次に何を書くかはっきりしないこと、ケチと思われやしないかという問題。私たちが「金持ち」だと知った人たちに何をプレゼントすべきか、もう十分、気前はいいか。本のことをどう話したらいいのか、そもそも話すかどうか。こうしたことすべてのせいで不安になるのだ。(p.540-541)

「コレクター」にまつわるエピソードの数々は、この日誌の記述にも現れる「不安」に端を発している。たしかに、初めての小説を公にする前のアマチュア作家にとって、それまで想像もしていなかった並外れた商業的成功が執筆にどのような影響をもたらすか、漠然と忍び寄る「不安」と形容するほかはない。金銭に関する問題などの現実的対応を微に入り細を穿つ表現がのしかかる不安を克明かつ如実に伝えて

いる。

しかし、大西洋を超えた出版契約が現実のものとなり始めると、ファウルズは「不安」を抱えながらも、希望を抱いて新世界へと旅立って行く。

Ⅲ. 東海岸編

ボストン、ニューヨーク

1963年9月4日

「コレクター」がタイムズ紙ベストセラーリストの第3位になった。

アメリカへ飛ぶ。これは怖い。統計上の数字は無意味。生存確率五分五分の気分。死がどうのこののではない。不思議と今、死ぬのはなんともない。なにごととも未完成のままなのだけれど。

9月14日-23日

自分を社会主義者と呼ぶ人たちの大半にならって、初めてのアメリカへと、私もスーツケースに彼の地へのこれまでの偏見を詰め込んで赴いた。アメリカ文学の嗜好、ヨーロッパ各所で知己となった美しいアメリカ人国外居住者たちのおかげで和らいだ偏見も、それ以外のほぼすべての点で悪化していた。一週間後、相変わらず(自分なりに)社会主義者として帰国し、見込みもなく恋愛感情を抱いていることをなんとか説明しなければならない。思春期の若者の顔の湿疹のようにはっきりと見てとれる欠点だらけの国だが、このかわいそうな子供が、大目に見てやれて、愛おしく、見栄えもいいことを誰も私に説明してくれなかった。だから、友人たちみんなに、お前は甘くなった、と言われるのを承知の上で、これからアメリカをおおむね賞賛しながら紹介してみよう。息抜き気分。(p.564)

ボストンに降り立ったファウルズは、以下のように毀誉褒貶相半ばする筆致で東海岸滞在の印象を書き連ねてゆく。理想の規範はヨーロッパに置かれ、イギリスとの比較、あるいは東西の両海岸の文化比較が街の景観、出会う人々の気質に対する印象記として綴られてゆく。注目すべきは、アメリカ文化に対していくつかのキーワードを設定しながら、ときに悪辣ともいうべき旧大陸の価値観で披瀝している点である。たとえばその一つに「開拓者精神」があげられる。

4

開拓者精神。台所に古いストーブがある。「台風が来たら、あれで料理でもなんでもしなければ」それでは現代生活にすべての装置が整っているというのに矛盾しているように思える。もちろん、矛盾しつつもたいへん魅力的なのだ。そこが、この国のさほど表に出ない魅力の一端なのである。洗練された小道具と原初的な野生の距離が極めて近いこと。(p.565)

そして、「パワー」も島国の小国出身のファウルズを驚嘆させる。

パワー。これがアメリカ。権力ノイローゼ。権力の応用。権力の詩。権力の心理学。長いクルマの列、流れるように走る大型急行列車、遊覧飛行、巨大ビル、その大きさと空間。ここではなににご

とも、単純な会話でも、かさがあり、エネルギーがあり、空間があって、すべて権力のシンボル、象徴、比喩なのだ。(p.566)

ファウルズは、ボストンを経て、ニューヨークへと向かう。

ニューヨークへ。ずっと雲の中だったが、やがて降下するとハドソン川とイースト川、自由の女神像、マンハッタンの下町の大きな高層ビルのかたまりが見えてきた。ボブ・フェトリッジが今までで一番ニューヨークのタクシードライバーらしいと言ったタクシーに乗った。ガラガラ声で喉を鳴らすブルックリン訛りでサード・アヴェニューを「ソイド・アヴェヌー」と発音し、ひっきりなしに話しかけてきて、グリニッチビレッジを案内してあげようと言う。「俺って風紀犯罪取締班の元警官だから、なんでも見せてやるよ」(p.566)

ルポルタージュ風のエピソードとして、短い会話の中に下町の風情をユーモラスに描き出す手腕には作家としての技量が満ち溢れており、長大な「日誌」を楽しみながら読み進めるのに一役買っている。また、詩的な表現もちりばめられており、その筆致からはファウルズ独特の自然描写の片鱗をうかがうこともできる。

ニューヨークの詩。雲の下、摩天楼の頭頂は霞む。陽光、窓のある崖が青い空に漂う天上の都市。見はるかす眺望にはクロードの絵のような安らぎがある。そして陽射しが緑色を帯びている。ニューヨークはクールで、熱っぽく、若い。腕をむき出しにしてドレスを着た少女たちのよう。(p.566)

自然描写のみならず、出会って観察した人物の特徴を捉えて生き生きと描き出す様は、大作の準備のためにスケッチの習作でそなえる画家にも似て、後に発表される長編群の人物描写を期待させる。

ニューヨークタイムズ紙のルイス・ニコルズとインタビュー。ぶくぶくと太った男で、大きなバグのような顔をした男。いかにもニューヨークらしい、ひねくれたユーモアを思いっきり凝縮している。この、誰のことも、あらゆることもひねくれで意気消沈させ、あらゆる純真なものを病んだものに変えてしまうエドワード・オールビー症候群、気に入った。彼は少し酔っていて、世間一般に対して明らかに機嫌を損ねていた。私もやや度を過ぎ始め、一時間ほどちょっと「ヴァージニア・ウルフなんてこわくない」のようだった。演じたのは彼と私である。私は、ここぞとばかりアメリカ人に「敵意」を示し、彼は、俳優チャールズ・ロートンのような口で「イギリス人なんて大嫌いだ」と言い続けた。それでも最後は打ち解け、仲良くなって終わった。(p.568)

5

アメリカ東海岸の旅を締めくくるエピソードとして、アイドルワイルド(旧JFK空港)での一節を引用しよう。

アイドルワイルド。ジャック・タチの映画に登場するような、近づくると自動的に開く魔法のドア。英国海外航空公社のホールで、イギリス人のビジネスマンが3人、全員、パイプをくわえて茶色のウールスーツを着て陽気そう。その中の一人が冗談を聞いて大声で吠えるように笑い、振り返って4歩、歩いてまた戻って来る。そんなおめでたい小人物たち。アメリカ人の強烈な男っぽさは大嫌

いだが、イギリスの男たちのこうしたまぬけな島国根性は吐き気がする。帰途、この3人はずっと私の前の座席でスチュワーデスたちに色目を使って、どうでもいい「愉快的」質問をしていた。「外は雨ですか」(3万5千フィート上空で雨が降るはずもないのだが)スチュワーデスは作り笑顔でこたえる。「お客様、外に出て確認してまいりましょうか。」あはは。女子たちをからかっていた。

アイドルワイルドを夜8時に出発、最後の陽の光。4時間後、アイルランド上空で夜が明け始める。乗っている時間は全体で6時間ちょっと。チャーチロウ通りに戻ってみると、ほんの9時間前は5番街を歩いていたんだと気付いて妙な感じ。ヴェニスに列車で旅行するよりも2倍も速くここからニューヨークの中心に行けるのだから。

イングランドの単調さ、訛りのなさ、これが第一印象。ある種、すぼんだ感じ。アメリカは立っていてイングランドは伏している。建物の話のことだ。それからパワーの欠如。流れが突然分岐し、テンポが落ち、プレッシャーもなくなり、超人は普通の人になり、パワーはどうでもよくなり、社会的名声と階級が取って代わる。(p.568)

映画を例えに出す場合でも、チャールズ・チャップリンではなく、自動化が進むアメリカ社会を揶揄するファウルズ自身の姿を、フランスの映画監督ジャック・タチの「ぼくの伯父さん」のユロ氏に重ねている。

そして、ここでは紳士気取りのイギリス人たちの島国根性に厳しい視線を向けている。ユーモアと辛辣さが入り混じった国民性比較のエピソードとして独立して読める完結性も備えていると言えよう。

IV. 西海岸編

ハリウッド

3月10日

ジャド・キンバーグがまたハリウッドから電話してきた。12週間滞在しに来て欲しいと。土曜日に飛ぶ。

1964年の上記の日付で、映画の製作者から電話で依頼が届き、ファウルズは再びアメリカを訪れる。「コレクター」の映画化に製作過程から加わるためである。東海岸での滞在記録の一節からも明らかのように、アメリカ人、アメリカ文化に対するファウルズの感じ方は、凡庸なくくりには収まらない独特な視点に彩られていたが、自作の映像化に際し、新たに関わるユダヤ系アメリカ人も含めてアメリカを代表する文化、映画産業に対する批判が繰り返されてゆく。

6

アメリカ。3月16日から31日

ロサンゼルス。ハチミツ色の夕方の大気につつまれた銀桃色の高層ビル群。椰子の木、高い木々、新芽と「芒」。高速道路と快適に制御されてすばやく行き交う大きなパワーの流れ——若者の通りの横切り方や椅子のデザインにも見られるジェットエイジ固有の店舗、このアメリカ的な動きのモードは至るところにある(動かないものにもこの簡潔な筋肉質の流れが備わっているのだ。)

ジャド・キンバーグは、いつもどおりの感じのいい温和なユダヤ人だ。ワイラー監督、「暫定政府(特別の助言者たち)、シナリオをめぐる闘争、サマンサ・エッガーをめぐるトラブルについて

まくし立てた。(p.589)

東海岸から継続するアメリカの「パワー」や自然、街並みの的確な描写に続いてユダヤ系アメリカ人と映画制作にまつわる複雑な問題がファウルズを待ち受ける。つまり、「日誌」で詳細が綴られてゆくことになる、原作「コレクター」のストーリーを大きく改変しようとする脚本スタッフ、原作の人物像と懸け離れたヒロインの配役がファウルズの「不安」の具現化として立ち現れるのである。難題に立ち向かうファウルズの心境は、「この映画は、制御のきかなくなったクルマのような気がする。今にも衝突が起きて、すべてがバラバラになってしまうだろう」(p.598)という表現に集約されている。クルマ社会のアメリカゆえに効果が上がる表現でもある。

それでも、ファウルズの新大陸への印象は、毀誉褒貶相半ばする状況が続く。西海岸ならではの豊かさを満喫するファウルズの期待は以下の引用に明らかであろう。

サンセット・ストリップのホテルで豪華気分を味わっている。夜景はとても美しく、澄んだ大気に果てしなくちりばめられた宝石がキラキラと輝いている。見渡す限り、どこまでも伸びている鎖状にそびえ立つ光の塔。これがマッドでリッチな女、アメリカか。度胸もありマッド度満々。(p.589)

配役の問題については、原作者として譲りがたい強い執着があり、制作陣が抜擢したサム(サマンサ・エッガー)とヒロイン、ミランダのイメージの乖離には肯首できない絶対的距離がある、とファウルズは感じざるを得ない。

私はサムの部屋の中を歩き回った。サムはソファに座って恐怖と退屈のあいだくらいの仕草で私を見た。相手を気遣って互いに無言。ウェイターが彼女に調合カクテルのピムを運んできた。私にも大きいサイズを持ってきた。私は隣に座ってなごませようとしたが、とても無理そうだった。

私が想像していたミランダからはあまりに遠いし、だれのイメージからも遠い。ワイラー監督がサムを使うところを想像できないのだ。一番大切なこと——生、知性、前向きさを完璧に欠いているように見える。外見上も内面も。それでも彼女のさまざまな過去の経歴が役柄に合ったのだろう。両親が離婚し、父親が准将で、アートスクールに2年間通ったこと(父は舞台出演は許さなかった)、かなり年上の男性に恋したことなど。——しかし重要な生気が感じられないのだ。(p.589)

冒頭にも引用したとおり、ファウルズの作品は芸術性と大衆性の両面から評価されており、小説の芸術性をあくまで貫こうとする原作者ファウルズと、映画という大衆娯楽の制作陣であるユダヤ系アメリカ人の対立は、起きるべくして起きる必然でもある。したがって、上記引用箇所が続く文が以下のように締めくくられるのも当然であろう。

ハリウッドの2つの誤ち。お金のかけすぎ。無駄になるとてつもない付け足し。そしてショービジネスが芸術と同じであるという信念。(p.589)

当時、すでに2,500本もの映画を見ていたファウルズは、映画化の配役についても見識があり、緻密に描き込んだヒロインの生き写しとして映画「ビリー・ライアー」に出演したジュリー・クリスティを考えていたのも自然であるし、以下の引用に登場するサラ・マイルズあたりにも納得がゆく。そして、

業界に多いユダヤ系アメリカ人への印象も歯に衣着せず、直截に描き出される。

私はニューヨークにいるサラ・マイルズを抜擢して、サムをクビにする考えをウィリーに売り込もうとした。ところが、ウィリーは、サラは「ちょっと汚れてて、きれいじゃないから、若い男が追っかけたりしない」と。

サムは病気のシーンを撮っている。メイク担当の男が来て病気のように見えるかどうかたずねた。私はこう言った。「いつも病気みたいだよ」「あなたたちイギリス人ってのは」と彼。「いつも不親切だね」彼は辛辣なニューヨークのユダヤ人なのだ。(p.596)

脚本に関しては、強引なハッピーエンドへ書き換えの目論見があり、元々のイギリス英語の会話文も単純でわかりやすい米語に修正され、配役に対する不満と相俟って、映画制作に絡む日記の内容は苛烈さを高めていく。その様子はウォーバートの伝記「ジョン・ファウルズ 2つの世界の生活」に詳しく記述されている⁴⁾。自作の映画化の質には満足できないまま、ファウルズは予定の滞在期間を終了し、一路、イギリスへ向かう。

ボブ・フェトリッジとネッドとリッツホテルのバーで最後に飲み、それから月の下、ほとんど誰も乗っていない飛行機は巨大な雲の海を越え、北側の黒い壁にカシオペア座を見ながら自動操縦で飛ぶ。まばゆい陽光の中で朝食、そして雲の中を何千フィートも不快に降下してゆく。ついに地上すれすれのところに出て来て着陸した。冷たくて湿っぽい風雨、3度の気温が、イングランドが小さくて20世紀の社会にしては悲惨なほど力不足であるという永遠の侮辱にさらなる一撃を加えた。交通渋滞、粗末な家屋、何もかもが狭苦しく見えること。まるで顔を一発殴られるようだ、このイングランドに舞い降りて来た時の気分は。(p.605)

このように、こじんまりした島国に降り立って、アメリカとは比べるべくもないスケールの乏しい母国の現実に向き合いながらも、イギリス人らしく植生の宿(Home! Sweet Home!)で以下のように妻エリザベスに出迎えられてファウルズのアメリカ滞在の日記は終わる。

エリズのもとへ帰ってくると、リアルでちょっと子どもっぽい安心感が得られる。まるで、「囚人」ごっこをしていて、触られずに「帰宅」できたような。彼女は私に鋭い疑いの目を向け、私がどれくらい変わったか、今回の旅で、どれだけひどく私にアメリカが染み付いたかを確認するために、鼻を効かせた。(p.606)

8

V. 終わりに

あの世界に引き戻されるのはごめんだ。私の今の世界は「魔術師」で、「コレクター」は終わっている。(p.624)

1964年3月22日付でこのように記され、ファウルズの創作意欲は「コレクター」から「魔術師」に向けられる。「コレクター」関連のアメリカ滞在日記は、膨大な日記の一部、あるいは浩瀚な「日誌」のわずか百数十ページではあるが、ここにはファウルズの新大陸の文化に対する見聞が凝縮されてお

り、また、後の長編小説での展開を予感させる辛辣な皮肉を込めた逸話も満載されている。たしかに、「膨大な原稿がオースティン、テキサス大学に保管されており、死後、新たな作品の出版の可能性が有る」⁵⁾と評されているように、未発表の作品集が刊行されれば、その量と質如何でファウルズの残した「作品」全体の評価が見直されないとは断言できまいが、一般読者も容易に入手可能な「日誌」を重要な「作品」の1つとして捉えることは可能である。

「日誌」は編集者チャールズ・ドレイジンの視点でまとめあげられた紛れもない「作品」であるが、手稿の日記から「日誌」への編集に関しては、必ずしも高い評価ばかりではない。

この巻は古くからの愛好者たちを満足させるであろうが、必ずしも、多くの新参者を獲得するとは限らない。さらに入念な編集がされていけば獲得できていたかもしれない。続巻は、おそらく「魔術師」「フランス軍中尉の女」の出版と映画化を扱うことになるだろう。一方、本当の愛好家なら未編集の日記の完全版——100万語で20巻相当——をエクセターの大学図書館で読むことができる⁶⁾。

編集された「作品」よりも未編集の手稿が推奨されることを「本当の愛好家」はどう考えるべきか。一般読者が未編集の100万語の原稿を読むのは現実的ではない。また、映画にしても、シナリオ編集、フィルム編集のいずれにおいても、「完全」なかたちとは何か。長大で未編集なオリジナルが、編集されて短くなった「作品」より優れているのか。映画「コレクター」は製作者の意図のもとに、脚本が共同作業で翻案され、映像が編集され、音声を加えられた総合芸術的「作品」である。主演女優の配役、演技を含め映画化の完成度に満足していない原作者ファウルズの手を離れた「コレクター」は、皮肉にもアカデミー賞最優秀主演女優賞受賞作品となり、カンヌ映画祭でも男優賞女優賞を獲得する結果となった。

「日誌」の編集者ドレイジンは、第1巻のイントロダクションの終わりを以下のようにまとめている。

実際、彼のフィクションと生のあいだの結びつきは極めて強いため、ジョン自身も、日誌もまた別の長編小説と思ってもらうのが一番だ、と仄めかしたことがある。フィクションを書く過程が人格をかくまう一連の仮面を生み出すことも含むなら、彼の2巻の日誌は、また新たな仮面を提供し、特定の出来事や時代のみならず、成年期から老年期に至るまでの全生涯を描き出す。「だから私は日記——あるいは私が「とりとめもないもの」と呼んでいるものは、私が書くまさしく最後の長編小説なのです」

この巻はその長編小説の前半である。若き作家が大きな成功を納めるものの、文学界からは距離を置いて生きてゆく。第2巻で自らに課した隠遁がどのような顛末を迎えたか分かるであろう⁷⁾。

ひるがえって、フィクション、ノンフィクションにかかわらず、「作品」とはなにか。韜晦趣味のあるファウルズ本人の日誌と長編小説を同一視する告白により、「作品」を定義する論考はより一層、困難な様相を帯び、研究ノートでまとめる範疇を超えているため、本格的論考を論文に託す次第である。

【注】

「日誌」の引用(斜体)はすべて、以下のファウルズの「日誌」*The Journals*からの拙訳による。引用文毎に付されたページはすべて本書のものを指す。

Fowles, John, *The Journals*, vol. I: 1949-1965, Charles Drazin (ed.), Northwestern University Press, 2003.

- 1) Lenz, Brooke and Shaffer, Brian W. (ed.), *The Encyclopedia of Twentieth-Century Fiction, volume I*, Wiley-Blackwell, 2011, p.140.
- 2) Lenz, *Ibid.*, p.142.
- 3) Acheson, James and Kastan David Scott (ed.), *The Oxford Encyclopedia of British Literature*, 2006, p. 352.
- 4) Warburton, Eileen, 'The Savage Eye' in *John Fowles A Life in Two Worlds*, Viking, 2004, pp.244-261.
- 5) Lenz, *The Encyclopedia of Twentieth-Century Fiction*, p.142.
- 6) Conradi, Peter J, *The Independent*, Thursday 23 October, 2003.
- 7) Fowles, John, *The Journals, vol. I.*, p.xx.